



Data 2022-38

監督・脚本・製作: アスガー・ファ
ルハディ

出演: アミル・ジャディディ/モー
セン・タナバンテ/サハル・
ゴルデュースト/サリナ・フ
アルハディ

👁️👁️ みどころ

アスガー・ファルハディ監督作品を観るのは本作が6本目だが、そのすべてが星5つ。“イランの巨匠”の脚本力と演出力は突出している。

刑務所からの休暇で2日間だけ出所してきた男は偶然拾った金貨で借金を返済し社会復帰を図ったが、それは虫のいい話。しかし、方針転換し、落とし主を探し金貨を返還すると、マスメディアにもはやされた彼は、一躍英雄に！しかし、しかし・・・。

この男は英雄？それとも詐欺（ペテン）師？ソーシャルメディアの光と闇の中、“英雄の証明”は如何に？こりゃ必見！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■本作は必見！この巨匠の過去5作品はすべて星5つ■□■

本作のチラシには、「第74回カンヌ国際映画祭 グランプリ受賞」、「本年度 米・アカデミー賞 国際長編映画賞 最有力」の文字が躍っている！そして、本作がイランの巨匠アスガー・ファルハディの最新作と聞けば、これは必見！

私がアスガー・ファルハディ監督の名前をはじめて知ったのは、①『彼女が消えた浜辺』（09年）（『シネマ25』83頁）を観たとき。その完成度の高さに感激し、星5つをつけた。以降、②『別離』（11年）（『シネマ28』68頁）、③『ある過去の行方』（13年）（『シネマ33』113頁）、④『セールスマン』（16年）（『シネマ40』20頁）、⑤『誰もがそれを知っている』（18年）（『シネマ45』240頁）、すべて星5つだ。

アスガー・ファルハディ監督はベルリン、カンヌ、ヴェネチアの三大国際映画祭の常連であるうえ、米アカデミー賞も二度受賞している。第94回アカデミー賞国際長編映画賞は、濱口監督の『ドライブ・マイ・カー』（21年）に輝いたが、本作は必見！

■□■なぜ刑務所に？なぜ休暇が？イランの保証人制度は？■□■

私は韓国映画を観ることによって、韓国では刑務所から出所した時に白い豆腐を食べる習慣があることやその意味を勉強したが、イランでは、出所した本人が近所の人々に“アッシュ”と呼ばれるスープをお祝いとして配る習慣があるらしい。本作冒頭、2日間だけ出所を許された主人公のラヒム・ソルタニ（アミル・ジャディディ）が、婚約者のファルコンデ（サハル・ゴルデュースト）の出迎えを受ける前に、そんなシークエンスが登場するので、それに注目！

また、日本では廃止の方向に進んでいる保証人制度が、イランではまだ生きているうえ、保証人が負担した金額を債務者が弁済しない場合、債務者に懲役刑が科せられるケースがあるらしい。本作はまさにそのケースで、その金額は1億5,000万トマン（約4,000万円）だ。さらに、イランには「刑務所の休暇システム」があり、ラヒムは今、“ある目的を達成するため”にそれを利用しているらしい。なるほど、なるほど。

塙を出た直後に、ファルコンデの出迎えを受けたラヒムは、車の中で慎重にファルコンデが持っているバックの中の17枚の金貨を確認したうえで、姉のマリ（マルヤム・シャーダイ）とその夫ホセイン（アリレザ・ジャハンディデ）の家にお世話になったが、さあ、彼が2日間の休暇の間に達成しようとしている“ある目的”とは？

チランには、「ソーシャルメディアの光と闇。『賞賛』と『疑惑』が交錯し、運命は翻弄されてゆく—社会に潜む歪んだ正義と不条理を、観る者すべてに突きつける衝撃の問題作」と書かれているが、アスガー・ファルハディ監督が本作で突き付けるソーシャルメディアの光と闇とは？

■□■主人公の狙いは？返済協議は？資金は？方針を大転換！■□■

3年前に借金を返せなかったため、保証人のバーラム（モーセン・タナバンデ）から訴えられた挙げ句、刑務所送りになってしまったラヒムの狙いは、借金を支払って和解し、訴えを取り下げてもらふことだが、なぜラヒムは今、そんな大金を持っているの？

それは、数日前にファルコンデが偶然拾ったバッグの中に17枚の金貨が入っていたため。もちろん、それは本来の持ち主に返すべき遺失物だが、誰のものかわからない以上、“神様からの贈り物”として、俺のために使ってもいいのでは・・・？それがラヒムの考えで、ファルコンデも同意したわけだ。しかし、そもそもその考え方の是非は？また、金貨17枚の価値をラヒムはいくらと見積もっているの？さらに利息を含めた全額を返済できれば問題解決だろうが、一部返済にしかならない場合、バーラムは同意するの？彼はラヒムの妻の兄として保証人になり、借金処理のため奔走したにもかかわらず、結局裏切られたため、ラヒムを訴えた立場だ。今やラヒムの元妻も離婚しているから、いくらホセインが仲介しても両者の返済協議は容易にまとまらないのでは？

金の相場が日によって変わるのはイランも日本と同じだが、ラヒムの期待に反して17枚の金貨は1億5,000万トマンの約半分の価値しかなかったから、予想通り協議は物別れに。つまり、ラヒムに深い恨みを抱くバーラムは、「全額を返さなければ訴えを取り下げ

ない」と言い放ったわけだ。さあ、ラヒムはどうするの？

■□方針の大転換は如何に？ささやかな善行が大反響を！■□

「英雄か、詐欺師か」という非常に難解な本作の主人公ラヒムは、いつもは穏やかに微笑んでいる温和な人物だが、時として、アレレこの男がなぜ？と思うような行動をとるので、それに注目！アスガー・ファルハディ監督はそんな複雑で多義的な性格の男ラヒムを主人公に据えることによって、本作を“観る者すべてに突きつける衝撃の問題作”に昇華させているわけだ。

バーラムとの和解交渉に失敗したラヒムは、他人の金貨を我が物にすることに後ろめたさを感じていたこともあり、結局、本来の持ち主に金貨を返そうと方針を大転換し、再び塀の中に戻っていくことに。そこで面白いのは、落とし物の張り紙を作って刑務所の電話番号を書き添えていたところ、刑務所内で労働に励んでいたラヒムのもとに、金貨の落とし主だという女性から電話がかかってきたこと。マリ夫婦の家にやってきたその女性は、「絨毯を織って、家族に内緒で貯めた金貨だ」と説明し、マリから金貨とバッグを受け取ってタクシーで立ち去っていったが、それってホントにホント？そのチェックは十分なの？警察を立ち会わさなくていいの？アスガー・ファルハディ監督の脚本にはそんなこんな疑問があるが、このラヒムのささやかな善行は、刑務所内でもマスコムでも思いがけない大反響を呼び起こすことに。

ここからアスガー・ファルハディ監督が書いた脚本は、怒涛の展開を見せていくことに。

■□美談の英雄から嘘つきのペテン師へ！怒涛の展開は？■□

テレビのワイドショーで取り上げるネタは硬軟様々だが、「借金で投獄されているにもかかわらず、拾った金貨を持ち主に返した正直者の囚人」という美談の英雄になったラヒムは、チャリティ協会のイベントにも出席。そこでは、吃音症の息子シアヴァシュ（サレー・カリマイ）のスピーチが聴衆の涙を誘い、3,400万トマンもの寄付金が集まったうえ、出所後の就職先まで斡旋してもらえることに。これによってラヒムはウハウハだが、逆にバーラムは悪徳債権者として世間から袋叩きにされたが、彼はかたくなな態度を崩さなかった。なるほど、なるほど。

ところが、新たな就職先のビルを訪ねたラヒムは、人事部長から「ラヒムの行いが作り話ではないか、という噂を耳にしたため、金貨の落とし主を連れてきて事実を証明しないと採用できない」と言われたため、大困惑。SNSを介して急速に広まったその噂の影響でテレビ出演がキャンセルされたばかりか、刑務所の幹部からも疑いの目を向けられることに。さあ、ラヒムはいかにして“英雄の証明”をしていくの？

ここから、アスガー・ファルハディ監督が書いた脚本は怒涛の展開を見せていくことに。その展開は、松本清張ばりの精緻な推理小説を彷彿させる、複雑かつ錯綜したものになっていくので、一人一人の目でしっかりと確認してもらいたい。興味深いのは、その展開の中でラヒムの気持ちがかかなりブレること。人間だから仕方がない、と言ってしまえばそれ

までだが、弁護士の私から見れば、事態をどんどんこじらせていく要因の1つは、間違いなくラヒムの優柔不断さにあると言わざるをえない。これでは“英雄の証明”はなかなか難しいのでは・・・？

■□■この偽装はダメ！この乱闘もダメ！■□■

日本人の私には、イラン人の主人公ラヒムの表情からその内心を推しはかるのは難しい。ラヒムはいつも軽い笑みを浮かべている柔らかな男だから、いろいろと辛い目にあっても、じっと我慢！そんなふうに見えるのだが、何の何の！アスガー・ファルハディ監督の脚本による本作の怒涛の展開の中、ラヒムは全く私の想定になかった2つの行動を見せるので、それに注目！

その第1は、姉夫婦の家を訪ねてバッグと金貨を持ち帰った、あの“落とし主の女性”の名前も住所もわからなかったため、婚約者のファルコンデを落とし主の女性に仕立てあげて、人事部長と交渉すること。これは「どうせ、わからないのだから」という開き直り(?)の上でのラヒムの策略だが、いくら何でもこんなインチキはダメ！第2は、「SNS上で悪いうわさを流した張本人はパーラムに違いない」と決めつけたうえ、彼の営む印刷屋に押しかけ、口論のあげくに乱闘騒ぎを起こしてしまうこと。これを見ていると、ラヒムは意外にバカ・・・？しかも、2人のおじさんが取っ組み合いのケンカをしている情景の一部始終をパーラムの娘ナザニン(サリナ・ファルハディ)が動画に収め、これを公開してしまったから、事態は最悪だ。これによって、ラヒムはチャリティ協会からも刑務所の幹部からも見放されてしまうことに・・・。SNSは怖い。ラヒムはそれを今更ながら思い知らされ、絶望のどん底に突き落とされることに。

■□■SNSは怖い！監督の狙いを各自の目でしっかりと！■□■

本作は日本からは遠いイランの保証人制度や刑務所の休暇制度など日本とは異なる制度下での物語。さらに、登場人物の顔はわかりにくいし、その数も多い。しかし、ストーリーは意外にシンプルだし、ラヒムの狙いや想定外の展開下でのラヒムの気持ちのブレもわかりやすい。その結果、ラヒムは、英雄から詐欺(ペテン)師になってしまうから、今どきのSNSは怖い。

ちなみに、私は本作導入部で、姉夫婦が育てているラヒムの息子シアヴァシュを、なぜ吃音症の子供に設定しているのかが気になっていた。アスガー・ファルハディ監督の脚本にはさまざまな伏線が用意されているから、これもきっと何かの伏線のはずだ。そう思っていると、案の定・・・。しかして、ラヒムが英雄から詐欺(ペテン)師に成り下がった後は、復活(“復権”?)を巡って、刑務所の幹部たちが吃音症の息子に父親への思いを語らせる動画を作ろうとするシークエンスが登場するので、それに注目！

佐村河内守が作曲したという『交響曲第1番《HIROSHIMA》』を有名にしたのは、その曲のすばらしさの他に、現代の“盲目のベートーベン”という肩書が見事にハマったためだ。しかして、刑務所の幹部たちの演出の下で吃音症の息子シアヴァシュは、父親ラヒ

ムについて何を語るの？その動画をいかに作り、いかに編集するの？それによって、ラヒムは一気に詐欺（ペテン）師から再び英雄に復権することができるの？いやいや、そんなことはないだろう。

本作ラストに向けてより明確になってくるアスガー・ファルハディ監督脚本の面白さとそんなこんな展開は、あなた自身の目でしっかりと！もともと、それは白か黒かを明確にするものではなく、“多義的”なものだからその点もしっかりと。

2022（令和4）年4月8日記